

## 第2回牧之原市教育のあり方検討委員会 会議録【概要】

1 日時 平成30年3月5日(月) 13:30~17:00

2 場所 牧之原市役所相良庁舎3階会議室

3 出席者

(委員) 島田桂吾、野村智子、佐藤利彦、池ヶ谷祐太、橋山妙子、今野英明、中島佑実、石井眞澄

### 4 協議事項議事録【概要】

#### (1) 牧之原市の子どもにつけたい力

- 対話は手法。
- 高校生からは、もっと早くに対話を学びたかったとの声も聴く。なんとなくではなく、中学生くらいからきちんと対話を学ぶことも大事ではないか。
- 授業中の対話の方法については、学校現場でも試行錯誤しながら進めている。
- 目標は、学校や検討委員会に出ている人だけでなく、保護者にも分かりやすい表現としては、「学ぶ」、「創造する」、「思いやる」は分かりやすい。
- 非認知能力も大切である。持続的にがんばる力や学力も非認知能力がしっかりしていてこそ着くものである。概念図中の生きる力の基礎・基本の部分に入るものとなるが、どう表すか。
- たくましさは大切なこと。学校では、たくまさを主体性と捉えて活動している。
- 牧之原市の教育理念「こころざしを持ち 夢あるひとづくり」は広い意味でのキャリア教育。キャリア教育とは、「どう生きるか」ということ。
- 子どもたちには、今だけでなく先の目標を考えてほしい。子どもに何の仕事が合うかということは親でも分からない。しかし、経験がないと子どもも自分が何にむいているのか分からない。経験は大切。
- キャリアプランニングでは、自分がどんな特性があるのか、どんな人生を描けるのかを考える。それには体験することも必要になる。
- 失敗経験も大事。学校でも家庭でも失敗しても温かく見守るという土壌をつくることも大切。
- 社会では、自分で「創り出す力」が大切だと考える。
- 新学習指導要領にもある「社会に開かれた教育課程」。学校は地域と連携してやっ  
ていかなければならない。しかし、学校が地域の理解を得る、学校が地域を理解  
するということに難しさを感じている。
- 学校、地域、家庭のそれぞれの役割がある。共通の方向を見ることが必要である。
- グローバル化しているので、ツールとして英語を使えるようにする。

## (2) 段階的な学び

### (高校)

- 高校生の段階で、牧之原市では地域リーダー育成プロジェクトを行っている。高校生だけでなく、関わる大人にも学びがある。
- 現実社会に接続していないと子ども自身にイメージがわからない。学校にいるときから、社会と接続することが必要だと考える。高校生から社会に出ていくことはとても大事。
- 面接をすると言葉遣いやあいさつ等にも幼さを感じる。学力だけでなく、キャリア教育も大事である。

### (中学校)

- 子どもも教員も中学・高校の交流がない。高校生から中学生に伝えることはとても効果的なことだと思うが、機会がない。
- 先の目標を持つキャリア教育という面は弱い。社会に出ていく人を育てるという意識を現段階では中学校では持ちにくい。
- 地域の人ともっと関わりを持たないと、とは思っていても難しい。もっと地域の力を借りる、社会に学校に入って来てもらう視点も必要だと思う。
- 職業教育については、教員も社会に出て行っていないので、子どもと一緒に勉強をしている状況がある。普段からの社会とのつながりが大切。

### (小学校)

- 大目標はそのとおり。中学生が小学生に話をする機会には、小学生はよく話を聞く。
- 保育園とも行き来をしている。教員は、子どもの情報交換をしたり、授業を見たりする。保育園児は、学校に遊びに来たり、小学生が自作のおもちゃを持って保育園に遊びにいたりしている。
- 親が過保護のところがある。子どもたちだけで解決できる力をつける。

### (就学前)

- 個の発達段階の時期なので、この目標でよい。
- 非認知能力をつける一番大事な時期。家庭や園だけでなく、行政としてもどうフォローしていくかということもある。

### (全体の課題)

- 就学前と小学校、小学校と中学校、中学校と高校の校種間接続をどのようにしていくか。